

《国際会議参加記》

From the Markets to the Associations に参加して

酒嶋 恭平

2018年3月22日から23日にかけて、京都大学にて *From the Markets to the Associations: A Comprehensive View of the Greek Mercenary World in the Classical and Hellenistic Periods: Second International Conference* が開催された。関西学院大学の藤井崇氏と、氏の下で日本学術振興会外国人特別研究員を務めたダニエル・ゴメス＝カストロ氏（以下、ゴメス氏と略記）の主催による本会議は、2016年11月12日関西学院大学で開催された第1回に引き続き、古典期からヘレニズム時代のギリシア世界における傭兵と市場の関係に焦点を当てた会議となった。

従来の研究では、傭兵の存在はポリスの求心力を測る指標の一つと考えられてきた。この議論では、前4世紀に傭兵が増加するのは、経済的に没落した市民がポリスを離れ傭兵稼業に身を染めた結果であり、それすなわちポリス没落の証拠であるとして解釈される。しかし、2000年代に入るとこうした通説を刷新する研究が登場した。その筆頭が、第1回に引き続き、今回も来日されたマシュー・トランドル氏である。彼は、経済的没落民以外にも傭兵となりえたこと、また傭兵の活動はエリート的人的紐帯によって促進されたと主張した。今回の会議は、氏の議論の更なる深化を目指したゴメス氏が軸となって組織されたものであるとのこと。

本会議では、日本、米国、ニュージーランド、そしてデンマークから報告者を迎え、合計9本の研究報告があった。初日には、ゴメス氏による開会の挨拶に始まり、3本の報告があった。トップバッターを務めた佐藤昇氏は、デモステネスの民会演説における修辞の効果を分析した *Philip's Xenoi in Demosthenes' Public Speeches* と題する報告を、続く杉本陽奈子氏は、前4世紀における商船拿捕についてポリスと商人の視点から考察した *Athenian Navy and Merchant Ships in the Fourth Century BC* と題する報告をそれぞれ行った。古典期を対象とした両者の報告が続いた後、初日最後の報告を務めたトランドル氏は、古典期以前を対象に、貨幣が東地中海世界に流通する以前の傭兵の活動に焦点を当てた *Professional-Foreign-Soldiers before Coinage: Mercenary Service in the Mediterranean World before 550 BCE* と題する報告を行った。初日が終わると、大学近くの飲食店で懇親会が開かれ、そこで盛んな意見交換が続けられた。

23日にはヘレニズム時代に焦点を当てた6本の報告があった。午前中は、アカイア人のコイノンにおける傭兵の位置を考察した岸本廣大氏 *What is the Mercenary for the Koinon? From Military and Social Perspectives*、アイトリア人のコイノンで活動したスコパスという人物に焦点を当てた伊藤雅之氏 *A High-Ranking Politician in Aetolia and a Mercenary General in Egypt* と、日本の若手研究者の報告が続いた。昼食を挟んで午後からはアッティカ地方に定

住した傭兵に関する師尾晶子氏の *The Paroikoi at Rhamnous Revisited* と題する報告の後、リュキアの植民地の建設年代を検討するマルク・ドミンゴ・ギュガクス氏による *The Kardakon Kome in Lycia: Status, Foundation and the Evolution of a Military Settlement* と題する報告が行われた。小休止の後、プトレマイオス朝エジプトにおいて「傭兵」と呼ばれた人々に焦点を当てた周藤芳幸氏の報告 *Contextualizing the 'Mercenaries' in the Later Hellenistic Middle Egypt*、次いで本会議の最後を務めたヴィンセント・ガブリエルセン氏は *The Economic Aspects of Hiring Naval Crews in the Hellenistic Period* と題して、軍事的マンパワーの市場について考察した。最後に、トランドル氏の閉会の辞で二日間に亘る会議は閉幕した。会議後に開催された懇親会は、大学からやや離れた会場ですき焼きに舌鼓を打ちつつ、会議の成功を祝して大いに盛り上がった。

会議全体に出席してみて、参加者としては、極めて有意義な会議だったと感じた。藤井氏、ゴメス氏の入念な準備と、当日スタッフとして配置されていた京都大学大学院の西洋古代史を専門とする修士課程の学生の助力もあってか、会の進行に全く問題は生じなかった。個々の報告は極めて高度であり、また、質疑応答の場面では報告を基に様々なトピックに話が及び、例えば、古代ギリシアにおいて「傭兵」をどう定義すべきか、という問いも熱く議論されていた。個々の報告では、傭兵の雇用が市場だけでなく社会に対しても極めて密接な関係を持ち、彼らの存在が、海上などで発生する戦争行為以外の略奪、植民活動と地元住民とのインタラクション、政策決定などの多様な場面で、物質的、観念的に影響力を持ったことが論じられた。古代ギリシア世界における傭兵というトピックは、多様な側面からアプローチ可能であるということに改めて認識することができただろう。筆者としては、傭兵たちがいかなるインセンティブの下で傭兵となったのか、傭兵として得た金銭が傭兵を辞めた後の生活でいかなる意味を果たし得たのか、など、傭兵の個人的な経験について興味を持った。

近年、国際的な研究会・国際会議がほぼ毎年のように日本で開催されている。本会議もそうだが、日本国内で極めてレベルの高い国際会議に参加できるということは、私を含む若手研究者・大学院生にとって大変幸福なことだと思う。こうした機会を生かし、来日された外国の研究者と積極的に交流できれば今後の研究にも利すること大であろう。

最後に、参加者としてこの会からどの程度得るものがあつたか、という点について筆者自身の極めて個人的な反省点を述べておきたい。今回の会議では、ディスカッションの場面であまり議論に参加することができなかった。専門の違いもあるが、やはり英語力の未熟さが大きな障害であったと思う。また、ディスカッションの場面では、来日されたガブリエルセン氏、トランドル氏、ギュガクス氏が議論の中心となっていた。せっかく「ホーム」である京都で開催された会議なのだから、単なる一オーディエンスでなく、「参加者」として能動的に議論に参加できれば、より有意義な会議参加となっただろう。これは筆者自身の今後の課題としたい。

(京都大学大学院博士後期課程)